

追悼 小林千草先生

梅林 博人

表現学会の理事でいらっしやった小林千草先生が、昨年(2021)の11月初旬にお亡くなりになりました。東海大学をご退職後も、研究者として次々と著作を世に問われ、まだまだ、お書きになりたいテーマをお持ちのご様子でしたので、あまりにも突然の訃報に絶句しました。

先生の表現学会でのお姿は、いつも、生き生きとしていました。明るくよく通る声で凜としてお話になる姿、さらさらとメモを取り、時にペンを止めてじっくりとお考えになる姿、ご発表のレジュメから伝わる小気味よい語調・論調。そして、質疑応答で、話し手を見つめる真剣なまなざし、小さな顔つき、若手研究者に対する懇切丁寧なご教導、などなど。いずれの所作や姿を思い返してみても、華やかな印象が伴います。

小林千草先生の、中世から発する日本語の歴史を専門とした国語学者としてのご活躍は、佐伯国語学賞(1985年)および新村出賞(2002年)の受賞をはじめとして、きわめて多彩で多大了。本誌で別に用意される業績目録なども、その詳細を一目瞭然の形で鮮明に伝えてくれるでしょう。

その中で、これまでも、そしてこれからも不世出であろうと思われるのが、小林千草・千草子の共著の業績です。卓越した研究力に、あふれる創作の才能を融合させて独自の世界を築かれた先生は、一人二役をいかに演じ分けているのかについて、小林千草・千草子著『絵入簡約 源氏物語』(全三巻)で次のように述べています。「改めて、日本古典文学大系『源氏物語』五巻の読み直しが始まりました。最初の読み手は、ことばの研究者たる小林千草です。一巻を読み切ると、『絵入源氏物語』の挿絵をチェックし、そこを重点的に現代語に置きかえてみる。そのあと、千草子が小説家のリズムで一巻を読みつつ、本文に取捨を加えて、一気に原稿用紙に書き出していく。このような形で、この本は誕生していきました。」(一巻 あとがき)。この文章から、研究者の眼と作家の眼が分かちがたく存在し、その複眼で対象を把握していた様子がうかがえます。

また、先生は、夫君・小林賢次先生を、人間的にも研究者としても最もよく理解して支えてこられました。東海大学での最終講義では、いみじくも賢次先生とご自分の研究姿勢の違いに触れられました。ハビアン(天草版平家)と、原典とおぼしき平家の表現を対照した時、両者の表現の相違が明らかになればいいというのが賢次先生。千草先生はそこから先の、ではハビアンがどの平家を選んで天草本を書いたかを特定したくなるのだとおっしゃっていました。そうした違いを理解しつつ、千草先生は常に賢次先生を敬愛し、賢次先生ご他界後もその遺志を継いで『中世語彙語史論考』を出版されました。編集後記は千草先生がお書きになりましたが、それは、ご夫婦で研究の世界を歩いてこられた賜物であり、内助の功に頭が下がりました。

小林千草先生の偉才に敬意を払い、ここに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(相模女子大学)

小林千草先生 履歴・業績

[略歴]

- 1946年 12月 鹿児島県に生まれ、京都府で育つ
- 1962年 4月 京都府立朱雀高等学校入学 1965年 3月卒業
- 1965年 4月 京都学芸大学学芸学部国文学科(1966年 4月、京都教育大学教育学部に改称)入学 1969年 3月卒業
- 1969年 4月 東京教育大学大学院文学研究科入学 1972年 3月修士課程修了
- 1984年 4月 国立長野工業高等専門学校 非常勤講師(1987年 3月まで)
- 1985年 3月 佐伯国語学賞受賞
- 1988年 4月 横浜国立大学教育学部 非常勤講師(1991年 3月まで)
- 1988年 4月 大妻女子大学文学部 非常勤講師(1993年 3月まで)
- 1993年 4月 Junior College Seijo University, Assistant Professor(1998年 3月まで)
- 1993年 4月 成城大学短期大学部 助教授(1998年 3月まで)
- 1998年 4月 Junior College Seijo University, Professor(2004年 3月まで)
- 1998年 4月 成城大学短期大学部 教授(2004年 3月まで)
- 2002年 11月 新村出賞受賞
- 2004年 4月 Tokai University, Professor
- 2004年 4月 東海大学文学部 教授(2012年 3月に定年退職、2015年 3月まで特任教授として在籍)
- 2009年 6月 表現学会理事に加わる

[主要著書]

- 日本書記抄の国語学的研究 1992 清文堂出版
- 原本「信長記」の世界 1993 新人物往来社
- 応仁の乱と日野富子—将軍の妻として、母として— 1993 中央公論社
- 中世のこぼと資料 1994 武蔵野書院
- こぼの歴史学—源氏物語から現代若者こぼまで— 1998 丸善
- 近松母と子、女と男のコミュニケーション 2001 平凡社
- 中世文献の表現論的研究 2001 武蔵野書院
- 清原宣賢講「日本書記抄」本文と研究 2003 勉誠出版
- (編著)文章・文体から入る日本語学—やさしく、深く、体験する試み— 2005 武蔵野書院
- こぼから迫る能(謡曲)論—理論と鑑賞の新視点— 2006 武蔵野書院
- 女こぼはどこへ消えたか? 2007 光文社
- こぼから迫る狂言論—理論と鑑賞の新視点— 2009 武蔵野書院
- 現代外来語の世界 2009 朝倉書店

伊達政宗、最期の日々 2010 講談社
淀殿 戦国を終焉させた女 2011 洋泉社
『明暗』夫婦の言語力学 2012 東海教育研究所
絵入簡訳源氏物語 一～三 2013-2014 平凡社
(共編)日本語史の新視点と現代日本語 2014 勉誠出版
『天草版平家物語』を読む―不干ハビアンの文学手腕と能― 2015 東海大学出版部
幕末期狂言台本の総合的研究―大蔵流台本編― 2016 清文堂出版
『大かうさまぐんき』を読む―太田牛一の深層心理と文章構造― 2017 東海大学出版部
幕末期狂言台本の総合的研究―鷺流台本編― 2018 清文堂出版
幕末期狂言台本の総合的研究―和泉流台本編1― 2019 清文堂出版
百人一首を読む―幕末・嵯峨山人の口語訳とともに― 2020 清文堂出版

○その他(千草子としての著書)

ハビアン―藍は藍より出でて― 1991 清文堂出版
ハビアン落日―羽給べ若王子― 1991 清文堂出版
於大と信長―忍ぶは一定忍び草― 1991 福武書店
ハビアン平家物語夜話 1994 平凡社
室町を歩いた女たち 1995 小学館
室町万華鏡―ひざかりの女と残照の男たち― 1997 集英社
戦国絶唱―いのちなりけり― 1998 講談社
翠子―清原宣賢の妻― 1999 講談社
洛中洛外―清原宣賢の妻― 2003 講談社
北国の雁―清原宣賢の妻― 2004 講談社
南蛮屏風の女と岩佐又兵衛 2010 清文堂出版
寺田屋異聞 有馬新七、富士に立つ 2015 東海教育研究所
戦後に生まれて グミと野いちご 2020 武蔵野書院

※履歴・業績については、東海大学の湯浅彩央氏に御協力を賜った。